

小学館
からの
お知らせ

1/3

速報

第24回

「小学館ノンフィクション大賞」 最終選考結果のお知らせ

大賞

『消された信仰 最後の「かくれキリシタン」の暮らす島』
広野真嗣(ひろの・しんじ)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』『SAPIO』3誌主催による「第24回小学館ノンフィクション大賞」の最終選考会（午後5時から、ホテルオークラ東京）を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は大賞に広野真嗣『消された信仰 最後の「かくれキリシタン」の暮らす島』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として300万円が贈られます。

受賞を祝う会は、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。

第24回

『小学館ノンフィクション大賞』
最終選考結果のお知らせ

主催 (株)小学館 週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

大賞

『消された信仰 最後の「かくれキリシタン」の暮らす島』

広野真嗣(ひろの・しんじ)42歳

現住所：東京都 職業：フリーランス記者

【プロフィール】

1975年11月26日、東京都生まれ。1998年に慶應義塾大学法学部法律学科卒業。神戸新聞社記者を経て2002年に猪瀬直樹事務所にスタッフとして入所、データマンとして活動する傍ら、2007年より石原都政、猪瀬都政で東京都専門委員。2015年10月よりフリーランスとして独立。週刊誌の委嘱記者として取材・執筆に携わる傍ら、総合月刊誌などにも寄稿。

【梗概】

2018年7月、世界文化遺産入りが期待される日本の推薦候補が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」である。だが、長崎県が作成したパンフレットからは、「最後のかくれキリシタンの暮らす島」の存在がこっそりと消されていた。現在に至るまで「かくれキリシタン」の信仰を守ってきた人たちの存在は、なぜ「消された、のか。

当初関心の薄かった筆者だが、ふとしたきっかけで目にした聖画集『かくれキリシタンの聖画』に載っていた「ちょんまげ姿の洗礼者ヨハネ」の聖画に惹きつけられ、長崎県北西部にある辺境の島「生月島」へと向かう。そこでは、早くも観光資源の開発が進む長崎市内とは全く異なる光景があった。数々の殉教聖地が「全く大事にされていない」という衝撃的な実情を目の当たりにしたのだ。光を当てられるべき存在のはずなのに、どうして——生月島の現状に、違和感が積み重なっていく。

一方で、信徒である島民への取材を続けた。潜伏期から続く独特の信仰スタイルに当初は面食らいながらも、とてつもない熱量をもって継承されてきた祈りであることに気付き、筆者は次第にこの信仰形態に魅了されていく。四十分にも及ぶラテン語混じりの長文のオラショ（祈り）をテキストもなしに、完全暗記させる伝誦スタイル。十六世紀キリスト教の修道士に由来する「苦行の鞭、をおまじないの道具として用いる風習。そして、キリスト教義への無関心——。この「ズレ」は現代のキリスト教へのイメージからすると奇異にも滑稽にも映るが、信仰と向き合う姿勢は恐ろしいほど真剣そのもの。古老の信徒たちが語る神秘的な体験に、カトリックとは違う宗教意識が見え隠れする。

取材を進める中で、カトリック系のキリシタン史研究者たちが、この信仰を「もはや隠れてもいないし、キリスト教とは別物」であるとして、江戸時代の潜伏信仰と切り離す意味合いを込めた「カクレキリシタン」という「蔑称」を發明していることを知る。そして、世界二十か国語で翻訳されたベストセラー『沈黙』の著者・遠藤周作の意外な「冷たい目線」にも突き当たる。

二五〇年間の弾圧の時代をぐり抜けた信徒の集落を歩きながら、取材対象は長崎県庁、文化庁、カトリック系のキリシタン史学者たちにまで広がった。

最後の信徒たちは何を考え、何に祈るのか。消滅の危機に瀕すなかで、それでも前向きに信仰を捉える人たちの存在が浮かび上がってくる。

【第24回「小学館ノンフィクション大賞」について】

24回目を数える今回は、本年8月末日に募集を締め切り、200作品に迫る力作が寄せられました。この中から次の5作が、本日午後5時からホテルオークラ東京で開かれた最終選考にかけられ、高野秀行、三浦しをん、古市憲寿の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

【最終候補作】

- 『その骨、どうします？ —お墓のゆくえ』
井上理津子
- 『十字架とドローン —「グレートネイチャー」に命をかけた男の生涯—』
妹尾一郎
- 『消された信仰 最後の「かくれキリシタン」の暮らす島』
広野真嗣
- 『潜入! 中国人の中 僕は反日映画の俳優になり、日本ツアーのガイドになった』
西谷格
- 『亡命ごっこ フランス—スペイン—モロッコ 自転車紀行』
前川仁之

- 賞金：大賞=300万円（複数受賞の場合は分割）
- 発表：受賞作は1月中旬発売号の『週刊ポスト』『女性セブン』、1月発売号の『SAPIO』誌上、および小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。
- 選考委員：高野秀行（ノンフィクション作家）、三浦しをん（作家）、古市憲寿（社会学者）
- 受賞を祝う会は、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。

【小学館ノンフィクション大賞】

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターに登龍門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『絶対音感』（第4回）、『まぐろ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）、『小倉昌男 祈りと経営』（第22回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢を問いません。